

『送張生』 歐陽修

北宋時代の逸材

北宋時代は九六〇年から始まる。唐帝国が滅ばされた後の五十三年間は次々に王朝が交替し、五代十国の時代といわれる。趙氏が宋国を打ち立てたが周囲の異民族の侵入により領土的にも財政的にも遠く唐代には及ばなかった。日本ではちょうど平安時代の中ごろである。

歐陽修、姓は歐陽、名は修。貧しい地方事務官の子として、江西省永豊県に生まれる。四歳で父を失い、おじに引き取られたが、文具をかうお金もなく、未亡人の母は砂の上に萩の莖をもって字を書いて息子に教えた。

十歳の時、近所の旧家の書庫から唐の大詩人韓愈の全集を見つけ読んだのが文学へ目覚めた初めであった。進士科に首席で合格し、官吏生活に入ったのは二十四歳で、時の

天子仁宗の九年目であった。仁宗は四十二年もの長きにわたって北宋を安定的に治めてきた名君であり、その退官まで臣下として才能を発揮でき、最後は宰相の地位まで上りつめたのは歐陽修の努力と幸運でもあった。

十年で二度の挫折

三十四歳の歐陽修は同朋範疇ちゆうはん円の左遷に対し、越権して反対したため周囲の重臣にうとまれ、湖北省義証県の長官に左遷されたのが第一回目の挫折であった。

三十七歳で都（汴京、今の開封市）に復帰した彼はそのすぐれた思想家、文章家、政治家としての才能を持って旺盛に活躍し、他の同志とともに要職に就き、その業績には目覚ましいものがあつた。友人の石介せいかいがその功績を「慶曆（時代名）聖徳の詩」に表して称えたが、反対党の意に背き、こんどは安徽省の滁州知事じよに左遷されたのが第二回目であつた。

ところが朝廷では、逸材を退けたことがかえって彼の名を高め、数年後中央政府で宰相の一人になった。仁宗没後、政府を輔たすけ国政に奔走する。また彼が進士科の試験委員長となったことは、その後多くの英才、たとえば蘇軾などを育てる機会を得たことになり、文人としても最高の指導者となった。

送張生

一別相逢十七春

顏顏衰髮互相詢

江湖我再爲遷客

道路君猶困旅人

老驥骨奇心尚壯

青松歲久色逾新

山城寂寞難爲禮

濁酒無辭舉爵頻

歐陽修

一別相逢う十七春

顏顏衰髮互いに相詢う

江湖我は再び遷客と爲る

道路君は猶旅に困しむの人

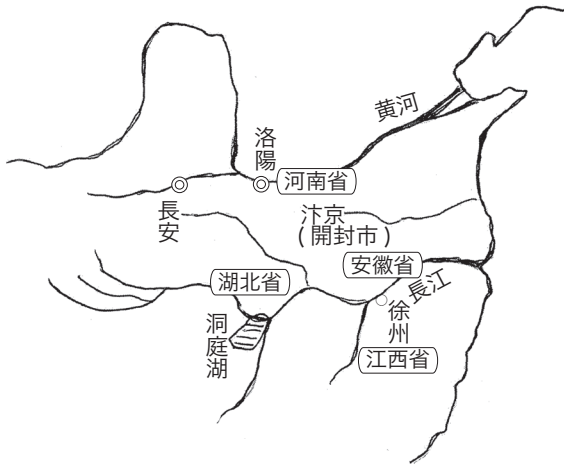
老驥骨奇にして心尚壯

青松歳久しくして色逾新たなり

山城寂寞禮を爲し難きも

濁酒辭すること無かれ爵を

舉ぐる頻りなるを



意解

ひとたび君と別れてから今再び会うまで十七回の春を数え、しわも増え白髪となつて、お互いに身の上を確かめ合つた。

私は再び地方に左遷された身であるが、君もまた定まった職も無くさすらいの旅に苦しんでいる人のようにあ

る。

老いた駿馬はまだ骨相が優れ、心意気はいっそう盛んであるという言葉もあり、また松は老木となつても風雪に耐えてますます青々と色鮮やかであるように（我々二人も駿馬や青松でありたいものだ）

山辺の田舎町はさびしく不自由で、心づくしのもてなしもできないが、濁酒だけは用意しましたので遠慮せずにごんどん杯を重ねてくれたまえ。

鑑賞

・三重の苦悩に見舞われた作者

この詩は歐陽修の四十歳ごろ、二回目の左遷を命じられ、滁州に暮らしたころの作品である。何しろこの地は気候は悪くないが、交通不便な山中にあり生活も風景も退屈であつた。もちろんこの左遷は生涯最大のつらい不幸な出来事であるが、そのほかにも彼の身に悲しいことが二つあつた。その一つは着任早々三人目の娘（名は師）の死に遭遇したことである。「吾が年は未だ四十にならざるに、三たび子を哭む腸を断つ。一たびの割しみも痛みは忍ぶ莫きに、屢痛めば誰が能く当えんや。…以下略」（五言古詩「白髪、女の師を喪ひて」より）父親としておいに悲涙を流している。

もう一つの不幸は病に苦しんでいたことである。「…中

略 我は独り春を知らず、久しく病みて空堂に臥す。時節は去きて挽き戻すすべ莫し、浩歌自ずと傷しみを成す」(五言古詩「暮春に感有り」より)

病名は不明だが、氣力がなえていくのも当然だ。このころに友人の張生が訪ねて来てくれたのである。

頸聯・尾聯に感動する

頸聯の心意氣が素晴らしい。左遷の詩にはおおむね、この世には自分を分かってくれる者がいないとか、この地で朽ち果てるのも定めであると嘆く消極的なものが多い(それもそれぞれ豊かな詩情がある)が、壮年期にあってこれから活躍しようという意気込みに共感する。現に歐陽修はその後都に帰り、宋王朝の安泰に、宰相として寄与した事実が、言葉にウソはなかったことを証明している。

尾聯がまたよい。「なんのおもてなしもできないが濁酒だけは満足するまで飲んでくれ」と歓待している。これ以上のもてなしがあるうか。飾り気のない質朴な作者の情を感じる聯である。

※科挙について

科挙とは(中央政府の)官吏登用試験。三年に一度実施された。時代により複雑多岐に変化しているので、概略の

み記す。

唐代では秀才・明經・進士・俊士・明法・明算の六科目に分かれていた。宋代では進士・明經・明法の三科目となり、王安石以降は進士科のみになった。試験は厳しく、郷試(地方選考)↓省試(都で行われる省単位の選考)↓殿試(天子臨席の中央選考)の三段階を超えなければ中央官吏には選ばれない。郷試と省試は三日間行われ、その間受験生は独房に閉じ込められる。寝具や食料を持ちこみじつくり解答する。

殿試は天子による最終面接のようなもの。合格率は三千人に一人ともいわれる。出題は「論語」「孟子」をはじめとする思想書・歴史書・文章・詩などの暗記と作詩作文などで、すべてを暗記し、秀作を示さなければ合格しない。名譽のため生涯をかけて挑む者がいた。合格者平均年齢は三十六歳ともいわれる。

一般に科挙に合格したものを「進士」としているが、正確には「進士科」に及第した者を指す。しかし「進士科」は他を寄せ付けないほどの難関であり、合格者も超優秀であったことと、宋代の王安石以降は「進士科」だけに絞られたので、「進士」とは科挙の合格者をさす代名詞のようになった。

隋代から清代まで続いた世界最大の国家公務員選考試験である。